

特別活動及び総合的な学習の時間の、大学授業に おける「近況報告」は、良好な人間関係を醸成するⅡ

“Recent Report” in university class will make good relationships of
“Special Activities and Integrated Studies” Ⅱ

小池 幸
MIYUKI KOIKE

はじめに

本取組は、昨年度の内容を引き継ぐものであり、パートⅡとしての位置付けである。詳しくは、小池幸特別活動的な学習の時間の、大学授業における「近況報告」は、良好な人間関係を醸成する2023-03-01 Contexture : 埼玉工業大学教養紀要40号p. 73-82を参照願いたい。

今年度入学した1年生のほとんどは、令和2年度（2020年度）から始まった新型コロナウイルスによる活動制限下で、3年間の高校時代を過ごしてきた。果たして、昨年度の「近況報告」の取組の成果が、本年度の教職クラス（ほぼ1年生主体）のメンバーにどのように反映されるのか、実践を通して明らかにする。

1. 「近況報告」の概要と昨年度の学生自己評価

毎回の授業開始時から一人約30秒のスピーチとブレイクタイム（学生同士の交流時間は数分間）を含めた合計約20分間の中で、全員の学生それぞれが日々体験したこと、考えていること、取り組んでいること等を題材にして教室の前方で発表し、発表後、一人一人が教室内を自由に移動し、さらに不特定多数の学生とスピーチの内容をきっかけとした交流を行い、人間関係を深めて行く取組である。

※昨年度はフリートーキングタイムであったものを、今年度ブレイクタイムと呼称変更している。

【令和5年度「近況報告」の取組における学生の自己評価】（抜粋）

（1）「近況報告」と自分の成長

○自分の思っていること、相手に伝えたいことを上手く言語化できるよう

になった。

- 一人一人の思いを知ることができた。その後のフリートークで交友関係を気付けた。
- 誰にでも伝わる表現について気を配れるようになった。
- 聞き手が少しでも喜んだり興味・関心を示してくれたりしそうな話題探しに真剣に取り組むようになった。
- 他の人の話題や考えに触れることは新鮮で、自分の考えの幅を広げることにつながった。
- 自分が教師になった状況を想定できるようになった。
- 自分の今までの取組を振り返ることができ、自身の再発見につながった。
- 自分の話が伝わるようにするため、文の構成を考えた。
- みんなの前で話すことに自信が持てるようになり、恥ずかしさが消えた。
- 聞き手の目を見ながら話せるようになった。
- 友達とのコミュニケーションが、特別活動や総合的な学習の時間に必要なことが分かってきた。

(2) クラス全体の変容

- 「近況報告」後、挨拶や質問などが交わされる温かいクラスになった。
- 他者との心理的距離が縮まり、最初よりコミュニケーションがかなり増えた。
- 最初の頃は名前も知らなかったが、名前を覚えることによりクラスが明るくなった。
- 一人一人の思いや考えが出しやすいクラスになった。
- コミュニケーションが活発になり、笑顔が増え、仲がよくなった。
- 全員とコミュニケーションが取れるようになった。
- みんながこの授業に積極的に参加するようになり、ワンチームのクラスと感じた。
- 人の「近況報告」に対して悪意のない笑い声が増えた。何を言っても大丈夫というクラスになった。
- 最初の頃と比べて、誰かと誰かが話している場面が普通の生活に広がり、校内で会った人との会話場面が格段に多く見られるようになった。
- 個人が埋没しないクラスになったと思います。
- 先生が大学で今までに見てきたどのクラスよりも仲がよくまとまったク

ラスと誇れます。

(3) 後輩へのメッセージ

- この「近況報告」をたかがと思うかしっかりと取り組むかでこの授業の充実感、成長度、達成感が変わります。
- 大学の授業で、友達ができる唯一の授業です。大切にしてください。
- 自分が今何をしているのかを考えられるよい機会となる「近況報告」です。
- みんなの前で緊張しますが、話題を共有できることは楽しいですよ。
- 人前で話すことはすぐにはできないので、今から伝える力を養ってほしい。
- 最初は面倒くさいと感じたが、回数を重ねる毎にトーク力が身に付いてきました。
- 話したことがない人とコミュニケーションを取ることで考え方の多様性を知ることができる「近況報告」です。
- 最初は緊張すると思いますが、慣れてくると楽しくなります。そして、スピーチの自信につながりますよ。
- 最初は「だるい」や「恥ずかしい」などの感情があると思いますが、徐々に抵抗がなくなり、みんなの反応を見るのが楽しくなりますね。
- 生徒の前に立ち堂々と話さなければならない教師という職業に就くだけでなく、様々な場面で力になることを学びます。
- 「コミュニケーション」という言葉の意味が「近況報告」の活動でよく分かりますよ。

2. アイデンティティーのコペルニクスの転回の教職課程

高校を卒業したばかりの1年生は4月、大学という未知なる世界で新たな歩みをスタートさせる。高等学校時代に下調べした大学生活に突入するわけである。この中で、つい先月までの高等学校では、小学校時代から12年に及ぶ主に先生方からの教授という授業形態に慣れ親しんできた状況から、一気に「教職課程」という教授する役割に転換する状況へと劇的な変化を否応なしに求められるのである。教えられる側から教える側への立場の逆転である。大学における単位修得のイロハもままならない中での教員免許取得に向けた船出でもある。

私が担当する科目は週1回の「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」である。勿論,大学には教職課程専門の部署があり,日々学生への指導を行っている。私は教職課程の指導を担う一人として,私の科目からのアプローチを通して,学生一人一人を教員として自覚に満ちた高見の自分自身への変革を目指すものである。

学生の多くは,前述した教授する側への立場の切り換えに戸惑う現実がある。無理もないことであり,平素の授業では教授される側であるのに対し,教職課程の授業の時には教員としての心構えや実践行動が求められるのである。学生は皆教員としての自分自身の在り方に,疑心暗鬼な得体の知れないプレッシャーに苛まれている状況も否定できない。

これらから,留意しなければならないことは,「教職課程で学ぶということは教員としての心構えをしっかりと持たなければならない」というフレーズである。学生自身は分かっているが,今一步乗り切れないのは,いきなり階段の1段目から5段目まで飛び上がるような実感であり,ついていけない自分に劣等感を覚える不安が見て取れる。大切なことは,「少しずつ理想の教員像に近づいていけば大丈夫」という逆説的なアプローチに落ちつくものととらえる。今のあなたを後ろからやさしく押してあげるスタンスを基に,学生一人一人に教員としてのアイデンティティーの確立の第一歩を踏み出させることを励行している。

3. 「近況報告」と「特別活動」・「総合的な学習の時間」との関連

まず,改めて学習指導要領に示されている両科目の目標に着目したい。

【特別活動の目標】

「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ,様々な集団活動に自主的,実践的に取り組み,互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して,次のとおり資質・能力を育成することを目指す。」

【総合的な学習の時間の目標】

「探究的な見方・考え方を働かせ,横断的・総合的な学習を行うことを通して,よりよく課題を解決し,自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」

ここで注目したいことは、両科目に共通する「課題解決」である。平たく表現すれば、特別活動は学校内や教室内で日頃起こる身近な課題解決であり、総合的な学習の時間は個人個人の課題から始まり、宇宙規模までの広い範囲の課題解決である。

また、課題のカテゴリーは相違するものの、他者との協働による解決が多く、の場面に求められていることも大きな共通点である。そして、このことは、国の教育の方針である「アクティブラーニング」と一致する。すなわち、どのように学ぶか。換言すれば、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの学びに集約される。

次に、「協働」の場面の効果的な展開に着目したい。

学校の教育活動において、生徒が集団で活動することは日常茶飯事であるが、問題は協働の質である。単なる寄り集まりの活動とこなれた人間関係に基づいた活動では後者が確実にリードする展開となるのは自明である。強いて理由を挙げれば、協働作業の中には必ずと言っていいほど「創造的な意見表出」が付きものだからである。そしてこれは、こなれた人間関係の中でのディスカッションでより効果的となる。裏返せば、ぎくしゃくした寒い人間関係の中では良好な協働作業の成立が難しくなるということである。

まとめれば、特別活動・総合的な学習の時間の充実には、生徒間の自由闊達なコミュニケーション構築が理想論ではなく現実論として強く求められることとなる。これらを再確認し、本年度の新たな取組にコマを進める。

4. 望ましいコミュニケーション構築へ向けた「近況報告」の取組

本取組は、実際の学校現場での指導を指導者としてどのように受け止めるか、そしてどのように指導するかの実験値を増やすことを目的としている。

4.1 「近況報告」のポートフォリオ化

「ポートフォリオ」とは、分野によってその具体的な意味や内容は若干相違するところがあるが、教育分野においては、

- 係る活動の足跡が、文字や写真あるいはデータですぐに読み取ることができ、工夫改善に役立てることができる蓄積型成果物と解することができる。

今年度は、第1回授業時に、履修者全員の「近況報告」が各授業回ごとに記載できる小冊子をポートフォリオ化できるように各自に配布した。小冊子の記入は、発表を行っている時、各自がとらえたキーワードをメモ書きしていくこととした。ネームカードの活用は前年と同様である。自分なりにとらえた発表者のメモ書き内容が授業を重ねるごとに蓄積され、ブレイクタイムでのコミュニケーションの糸口になってきた。

また、自身のポートフォリオには自分を含めた全員の足跡が示されているので、次の発表内容の構築や他者の性格や興味関心が深くつかむことができ、真剣なスピーチ内容構成の資料ともなった。

全員スピーチ後のブレイクタイムでは、自席を立ち上がり、ポートフォリオに基づいた意中の人を決め、積極的なコミュニケーションに結びついた。このブレイクタイムにおける決め毎は1つのみ存在する。それは、絶対1人にはならないということである。20数名の出席者の散らばりは、2人のグループもあれば時として10人のグループも教室内に存在する。これは、授業回ごとに常に変化し、授業参加のモチベーションになるとともに、自分自身の日々の行動への意識向上にもつながる結果となった。

4.2 特別活動に関する学級会の実践

特別活動の内容は、中学校においては①学級活動 ②生徒会活動 ③学校行事の3つで構成されている。

高等学校においては①ホームルーム活動 ②生徒会活動 ③学校行事の3つで構成されている。

この内容で中核を占めるものが①の学級活動・ホームルーム活動である。そして、さらにその中心が、主に学級の共同の課題解決を図る話し合い活動（通称：学級会・ホームルーム会議）である。

周知の通り、学級会は司会グループ（司会・黒板書記・ノート書記など）が会の運営を行い、全員で話し合う生徒の自発的、自治的な実践活動である。これまでの実践から、個人の発言力と学級の親和的な雰囲気が高ければ高いほど活動のねらいは達成される傾向が極めて強い。逆に、個人の発言がなく、一部の人の意見のみでの展開や、いわゆる物言えは唇寒しの雰囲気では良好な会は極めて困難である。

しかし、「近況報告」「ブレイクタイム」の取組を通して、個人と集団がうまく醸成され、話し合いの場において、建設的な意見や他者を尊重する意見、そ

して実践意欲の醸成が確実に図られてきた。特筆すべき成果である。

4. 3 総合的な学習の時間に関するフィールドワークの実践

総合的な学習の時間における探究課題は学習のメインであり、以下4つが例示されている。

- ①現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題
- ②地域や学校の特色に応じた課題
- ③生徒の興味・関心に基づく課題
- ④職業や自己の将来に関する課題

この4つの中で、総合的な学習の時間の活動・指導展開を比較的捉えやすいものは②地域や学校の特色に応じた課題である。

昨年度までは、フィールドワークを行う時、制限や条件をほとんど設定していなかったが、今年度から事前に編成したグループ行動を条件とした。事前に配布したワークシートのグループごとの作成、そしてフィールドワーク時でのグループごとの実践へとつなげた。

特別活動の項でも述べたように、総合的な学習の時間のグループワークでも、親和的雰囲気の中での意見集約や実践行動が実に円滑に進み、学生一人一人が「近況報告」のメリットを享受した瞬間でもあった。

5. 【令和6年度 「近況報告」の取組における学生の自己評価】(抜粋)

(1) 「近況報告」と自分の成長

- 自分の長所短所が見付けられた。
- ブレイクタイムの時、自ら話しかける勇気が少し身に付き、また、話しかけられる喜びも得られた。
- 自己管理（自分のことに責任を持つ）しようという気持ちになった。
- もともと自分は人前で話すことは苦手でしたが、少しずつうまくなってきたと自覚しました。
- 自分の考えを自分の言葉で表現することにやりがいを感じ、表現力が向上したと思う。
- 話したことのない人に、「近況報告」で知った内容を基にしたので糸口がわかり、積極的に話しかけられるようになった。
- 台本がなくても、しっかりと前を向いて、皆に話せるようになった。気持ちがいいですね。

- 自分の思いを何とか皆に伝えるための工夫が必要なことがわかった。
- 何を話すかを考える習慣が身に付いてきた。
- 教員として生徒の前に立ち、スピーチする場面が想像できるようになった。
- 話のネタをどんどん増やしていく必要性を強く感じた。きっと生徒の前でも同じなのかな、強く思った。
- 学科が違って、みんなが性格に名前を呼んでくれるのがうれしかった。大学では他の人の名前なんて覚えられないものと思っていたから。
- 何気ないことでも、皆が思いを共有してくれることがうれしかった。
- コロナ禍で高校生活を過ごしていた時は、他の人との関わりはほとんどなかったが、やっぱりみんなでワイワイするのはいいですね。

(2) クラス全体の変容

- 皆と話し合うことで、クラスの仲がどんどんよくなってきた。
- 何回もない授業で、皆が話しやすい空気感に満たされてきた。
- 相互理解が深まった。
- 友達の、スピーチのやり方を学ぶことができた。
- 「近況報告」することで、皆がその人のことを知ることができるので、割と簡単につながることができました。
- 最初の頃は、何で「近況報告」をやるのかを理解できなかったが、続けることで、特別活動や総合的な学習の時間にとって、とても重要な活動になることがわかってきた。
- 学科を超えて仲よくなれたことはうれしかった。
- いろいろな人の話を、要点をまとめメモできるようになった。
- 皆とよこのつながりが強くなったと実感している。
- 大学に入学した時は不安だったけど、った以上に交流ができ、強への集々が皆よくなったと思う。
- 他の人のスピーチをしっかりと聞く重要性が理解できてきた。
- 一人一人の性格や興味関心事など多く知ることができ、業に参加することが楽しかった。

(3) 後輩へのメッセージ

- 教職のメンバーと仲良くなれるよい機会です。「近況報告」はこれを後

押ししてくれますよ。

- 1週間の中で1つはポジティブはことをしておくで「近況報告」はスムーズにいきますよ。
- 人前で発表が苦手な人も必ず上手くなりますので、積極的にトライしてみてください。
- 自分の意見を自分の言葉で表現できる難しさと素晴らしさを、是非味わってください。
- 大学の講義というと、生の話を聞くというイメージが強かったが、分もみんなも積極的に授業に関わることへの期待と緊張感がわいてきた。
- いろいろな人と関係を深めるきっかけになるので、是非チャレンジしてみてください。
- コミュニケーション能力をつけるにはとてもよい活動です。是非、積極的に関わってください。
- 今までは人前で話すことは面倒くさいし自信がない人も、短いスピーチでたくさんの方が学べる「近況報告」ですよ。
- 授業の時だけのコミュニケーションではなく、授業前や終わった後、休みの日などの交流も自然と開けてきますよ。
- 「近況報告」を重く考えずに、話してみることが一番ですよ。

6. 成果と課題

6.1 成果

- 昨年の自己評価の内容が今年度の自己評価の内容に継承されており、取組の成果として認められる。
- 5限の授業であるが、授業が待ち遠しいという意見も多数寄せられ、授業前後のインフォーマルは会話においても確実に確認できた。
- 「隣は何をする人」という大学のイメージを、自分そして自分たちが一歩活動に移せば、大学生活を発展的に進められるという実感を得ることができた。
- 「近況報告」の取組から、授業後気の合ったグループで食事や観光に出かけるといった発展も多く見受けられた。
- 大学は独りぼっちという概念を杞憂に過ぎないという概念に書き換えたことは特筆できる。

6. 2 課題

- 本取組がこの後の大学生活に定着するかどうかの検証は難しいが、経験値の引き出しとなっていることの追跡調査の実践が必要である。
- 他科目、特に教職科目において、無理のない範囲でコミュニケーションを深める各自の実践を期待したい。
- 大学時代の「学びのポートフォリオ化」を推進する必要がある。

おわりに

予断は許されないが、コロナ禍からのシフトは確実に始まっている。その中心は、第一にコミュニケーションの回復ととらえる。本取組は私自身が裁量において取り組めるものであり、小さな一歩と自覚している。学生一人一人のコミュニケーションの喜びに満ちた表情の創造こそ、教育を担う使命と捉えたい。

参考文献

- ・ 文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年告示）
- ・ 文部科学省 高等学校学習指導要領（平成30年告示）
- ・ 小池 幸 特別活動及び総合的な学習の時間の、大学授業における「近況報告」は、良好な人間関係を醸成する
2023-03-01 Contexture :
埼玉工業大学教養紀要 40号p. 73-82